レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	膵頭十二指腸領域の腫瘍	
	タイプ	臨床専門領域	
タイトル情報	論文の英語タイトル	The effect of preoperative biliary drainage on postoperative complications after pancreaticoduodenectomy	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ10	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 6 ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Am Coll Surg	
	雑誌 ID		
	巻	192	
	号	6	
	ページ	726-733	
	ISSN ナンバー	1072-7515	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2001	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Sewnath ME	Department of Surgery and Gastro-enterology, Academic Medical Center Amsterdam, University of Amsterdam
	その他著者 1	Birjmohun RS	
	その他著者 2	Rauws EA	
	その他著者 3	Huibregtse K	
	その他著者 4	Obertop H	
	その他著者 5	Gouma D	
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	黄疸を有する膵頭十二指腸領域の腫瘍に対する術前胆道ドレナージと膵頭十二指腸切除の術後成績の関係を検討する。
	データソース	引用文献５
	研究の選択	
	データ抽出	
	主な結果	膵頭十二指腸切除例 311 例中体外胆道ドレナージまたは外科的ドレナージを行った 22 例、胆道内瘻化を行った 232 例(術前ビリルビン値４０μM 以下 177 例：Group１、４０～１００μM３２例：Group２、１００μM 以上２３例：Group３)、術前胆道ドレナージを行わなかった 58 例で術後合併症の頻度を比較した。胆道内瘻化を行った Group１、２、３の間には合併症の頻度に有意差はみられなかった（５０%vs５０%vs５２%)。胆道ドレナージを行った群と行わなかった群の間にも合併症の頻度に有意差はみられなかった（50%vs55%)。
	結論	術前胆道ドレナージは術後合併症の発生頻度に影響を与えなかったことより、ルーチンに胆道ドレナージを行うべきではない。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	吉川達也
	レビューワーコメント	膵頭十二指腸切除のレベルでは必ずしも術前胆道ドレナージは必要としないことが示された。手術死亡は全体で３例１%と高くないが、術後合併症の発生頻度が全体的に高いのが気になる。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝門部胆管癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Complications of hepatectomy for hilar cholangiocarcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ10	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	World J Surg	
	雑誌 ID		
	巻	25	
	号	10	
	ページ	1277-1283	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2001	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Nagino M	First Department of Surgery, Nagoya University of Medicine
	その他著者 1	Kamiya J	
	その他著者 2	Uesaki K	
	その他著者 3	Sano T	
	その他著者 4	Yamamoto H	
	その他著者 5	Hayakawa N	
	その他著者 6	Kanai M	
	その他著者 7	Nimura Y	
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	肝門部胆管癌肝切除例の術後合併症を検討する
	データソース	引用文献１０
	研究の選択	
	データ抽出	
	主な結果	対象症例 105 例中９４，３%に PTBD がおこなわれた。術後合併症は８１%にみられた。肝不全は全体で２７，6%にみられたが、肝切除量が５０%未満例では１６，７%にみられたのに対し５０%以上例では３６，８%と有意に高率にみられた（p<0,05)。重篤な合併症発生例 46 例中 36 例は回復したが、残りの 10 例は他の臓器不全をともなった肝不全で死亡した。30 日以内の手術死亡率は３，８%、入院死は９，５%であった。
	結論	肝門部胆管に対する肝切除、特に５０%以上の肝切除は肝予備能の低下と手術手技の困難性から肝不全を合併し易く、危険性が高い。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	吉川達也
	レビューワーコメント	肝門部胆管癌に対する肝切除、特に広範肝切除が危険性が高いという事実は示されているが、肝不全対策として PTBD が有効であるとのエビデンスは示されていない。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝悪性腫瘍	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extended hepatic resection: A 6-year retrospective study of risk factors for perioperative mortality	
	論文の日本語タイトル	拡大肝切除術：周術期死亡の危険因子に関する検討	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ13	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	11192922	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Am Coll Surg	
	雑誌 ID		
	巻	192	
	号	1	
	ページ	47 – 53	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2001	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Melendez J	Memorial Sloan-Kettering Cancer Center
	その他著者 1	Ferri E	
	その他著者 2	Zwillman M	
	その他著者 3	Fischer M	
	その他著者 4	DeMatteo R	
	その他著者 5	Leung D	
	その他著者 6	Jarnagin W	
	その他著者 7	Fong Y	
	その他著者 8	Blumgart LH	
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の６項目	目的	拡大肝切除術後死亡に関連する因子を検討する
	データソース	患者：拡大肝切除を受けた 226 例 研究施設：Memorial Sloan-Kettering Cancer Center, USA 研究期間：1992 年から 1997 年
	研究の選択	術後在院死亡の関連する 29 因子を統計学的に解析
	データ抽出	術後在院死亡の有無
	主な結果	術後在院死亡は 14 例（6%）に認めた。29 の臨床的因子を検討した結果、3 つの術前因子(胆管炎、血清クレアチニン>1.3mg/dL、血清ビリルビン>6mg/dL)と 2 つの術中因子(出血量>3L、下大静脈合併切除)が術後在院死亡と関連していた。
	結論	拡大肝切除術後の在院死亡には、上記 5 因子が関連している。5 つの因子のうち 2 つが認められる場合は特に注意が必要である。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	椰野正人
	レビューワーコメント	術前胆管炎が在院死亡と関連していることを述べている。解析法が Logistic 分析ではなく、いまいちよく理解できない所がある。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	進行胆嚢癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Successful management of preoperative cholangitis by percutaneous transhepatic biliary drainage: Case report of advanced gallbladder carcinoma with severe cholangitis	
	論文の日本語タイトル	経皮経肝胆道ドレナージによる術前胆管炎の治療：重症胆管炎を伴った進行胆嚢癌の 1 例	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ13	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 9 ）	
	Pubmed ID	なし	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Hepatobiliary Pancreat Surg	
	雑誌 ID		
	巻	1	
	号	4	
	ページ	424 - 428	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1994	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Iyomasa S	Nagoya University Graduate School of Medicine
	その他著者 1	Kato T	
	その他著者 2	Nimura Y	
	その他著者 3	Kamiya J	
	その他著者 4	Kondo S	
	その他著者 5	Nagino M	
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の６項目	目的	区域性胆管炎を伴った進行胆嚢癌の症例報告
	データソース	患者：63 歳女性 研究施設：名古屋大学医学部附属病院 研究期間：1994 年
	研究の選択	症例報告
	データ抽出	症例報告
	主な結果	症例は 63 歳、女性、肝門部胆管癌浸潤を有する進行胆嚢癌。他院で胆管炎のコントロールがつかず紹介入院。PTBD を追加施行し胆管炎を治癒せしめた後、拡大肝右葉切除＋尾状葉切除を行った。
	結論	術前胆管炎の治療には、適切な胆道ドレナージを行うべきである。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	椰野正人
	レビューワーコメント	区域性胆管炎の具体的な治療について述べた症例報告。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	閉塞性黄疸	
	タイプ	会陰洋専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Intestinal barrier dysfunction in clinical and experimental obstructive jaundice and its reversal by internal biliary drainage	
	論文の日本語タイトル	閉塞性黄疸における腸粘膜バリアー機能不全と内瘻ドレナージによるその改善	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ15 外ろう患者における胆汁返還は有用か？	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	8944448	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Br J Surg	
	雑誌 ID		
	巻	83	
	号	10	
	ページ	1345-1349	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1996	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Parks RW	The Queen's Univ. of Belfast, UK
	その他著者 1	Clements WDB	
	その他著者 2	Smye MG	
	その他著者 3	Rowlands BJ	
	その他著者 4	Diamond T	
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の6項目	目的	閉塞性黄疸における腸粘膜バリアー機能を評価する
	データソース	患者：閉塞性黄疸で内瘻ドレナージを受けた 33 例 研究施設：Queen's 大学病院 研究期間：記載なし
	研究の選択	内瘻ドレナージ前後における腸粘膜透過性の変化
	データ抽出	Lactulose-mannitol test
	主な結果	閉塞性黄疸患者では、閉塞性黄疸がない対照患者や健常ボランティアーに比べ Lactulose-mannitol 比は有意に上昇していた。内瘻術後 28 日目には、ほぼ正常域まで低下した。
	結論	腸粘膜のバリアー機能は閉塞性黄疸時には障害されるが、内瘻ドレナージにより胆汁が腸管内に流れるようになると改善する。
	備考	動物実験によるデータも併せて記載されている。
レビューワーコメント	レビューワー氏名	椰野正人
	レビューワーコメント	内瘻ドレナージにより腸粘膜バリアー機能が改善することをヒトで示した意義ある論文。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	閉塞性黄疸	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Increased intestinal permeability and altered mucosal immunity in cholestatic jaundice	
	論文の日本語タイトル	閉塞性黄疸における腸粘膜透過性亢進・免疫能障害	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ15 外ろう患者における胆汁返還は有用か？	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	9488518	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg	
	雑誌 ID		
	巻	227	
	号	2	
	ページ	205・212	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1998	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Welsh FKS	St. James's University Hospital, UK
	その他著者 1	Ramsden CW	
	その他著者 2	MacLennan K	
	その他著者 3	Sheridan MB	
	その他著者 4	Barclay GR	
	その他著者 5	Guillou PJ	
	その他著者 6	Reynolds JV	
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の6項目	目的	閉塞性黄疸における腸粘膜バリアー機能を評価する
	データソース	患者：閉塞性黄疸 27 例と性・年齢を match させた黄疸のない 27 例 研究施設：St. James's University Hospital 研究期間：記載なし
	研究の選択	閉塞性黄疸における腸粘膜バリア機能、免疫能を評価
	データ抽出	Lactulose-mannitol test、内視鏡下十二指腸粘膜生検、血清 IL-6、抗エンドトキシンコア Ig-G 抗体
	主な結果	Lactulose-mannitol 比は黄疸患者で有意に上昇していた。この上昇は、粘膜内の enterocyte やリンパ組織における HLA-DR 発現の upregulation を伴っていた。また、血清 IL-6 や CRP といった炎症性マーカーの増加、抗エンドトキシンコア Ig-G 抗体の増加も認められた。内瘻化ドレナージにより、Lactulose-mannitol 比は正常に復した。
	結論	閉塞性黄疸において認められる腸粘膜透過性亢進は局所における免疫細胞や enterocyte の活性化に関連している。この透過性亢進は内瘻化ドレナージにより改善する。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	椰野正人
	レビューワーコメント	ヒトを対照に閉塞性黄疸における腸粘膜バリア機能、免疫能を詳細に検討している。内瘻化の意義についても言及している。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆道癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	The value of bile replacement during external biliary drainage: An analysis of intestinal permeability, integrity, and microflora	
	論文の日本語タイトル	外瘻中における胆汁返還の意義：腸粘膜透過性、腸内細菌叢の検討	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ15	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	15024312	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg	
	雑誌 ID		
	巻	239	
	号	4	
	ページ	510-517	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2004	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kamiya S	Nagoya Univ. Graduate School of Med.
	その他著者 1	Nagino M	
	その他著者 2	Kanazawa H	
	その他著者 3	Komatsu S	
	その他著者 4	Mayumi T	
	その他著者 5	Takagi K	
	その他著者 6	Asahara T	Yakult Central Institute
	その他著者 7	Nomoto K	
	その他著者 8	Tanaka R	
	その他著者 9	Nimura Y	Nagoya Univ. Graduate School of Med.
	その他著者 10		

レビュー研究の６項目	目的	外瘻患者における胆汁返還の意義を検討する
	データソース	患者：閉塞性黄疸に対し PTBD で減黄中の胆道癌患者 25 例 研究施設：名古屋大学医学部附属病院 研究期間：2000 年 12 月～2002 年 1 月
	研究の選択	胆汁返還前後における腸粘膜、細菌叢の変化を比較
	データ抽出	腸粘膜透過性(Lactulose-mannitol test、血清 diamine oxidase 活性)、腸内細菌叢、腸内有機酸濃度
	主な結果	約 2 週間の胆汁返還より、Lactulose-mannitol 比は有意に低下し、血清 diamine oxidase 活性は有意に増加した。血清 diamine oxidase 活性増加の程度は、胆汁返還の期間と有意な正の相関を認めた。胆汁返還前の Lactulose-mannitol 比および血清 diamine oxidase 活性は、PTBD から胆汁返還を開始するまでの期間と関連を認めなかった。腸内細菌叢、有機酸濃度は胆汁返還により有意な変化を認めなかった。
	結論	外瘻中の患者では、胆汁返還を行うと腸粘膜の barrier function が改善するが、胆汁返還を行わないとその改善は認められない。Risk の高い手術をひかえた外瘻患者には胆汁返還を行う意義があろう。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	椰野正人
	レビューワーコメント	外瘻中に胆汁返還の意義について、初めてヒトでその意義を検討した論文。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝門部胆管癌、胆嚢癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Staging laparoscopy in patients with extrahepatic biliary carcinoma. Analysis of 100 patients.	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ16	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 6 ）	
	Pubmed ID	11882761	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg	
	雑誌 ID		
	巻	235	
	号	3	
	ページ	392-399	
	ISSN ナンバー	0003-4932	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Mar 2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Weber SM	Department of Surgery, Hepatobiliary Service, Memorial Sloan-Kettering Cancer Center
	その他著者 1	DeMatteo RP	
	その他著者 2	Fong Y	
	その他著者 3	Blumgart LH	
	その他著者 4	Jarnagin WR	
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		

レビュー研究の６項目	目的	肝門部胆管癌、胆嚢癌に対する Staging laparoscopy の評価
	データソース	対象：術前画像診断にて切除可能と診断された胆嚢癌切除例 44 例、肝門部胆管癌切除例 56 例 研究施設：Department of Surgery, Hepatobiliary Service, Memorial Sloan-Kettering Cancer Center 研究期間：1997 年 7 月 1 日から 2001 年 5 月 31 日
	研究の選択	Staging laparoscopy vs laparotomy
	データ抽出	手術所見、切除率、在院日数、手術時間
	主な結果	Staging laparoscopy を施行した対象症例 100 例中 35 例が切除不能と診断され、65 例が開腹手術を施行した。開腹所見で 65 例中 34 例が切除不能と診断された。Staging laparoscopy の正診率は 51%であった。正診率は肝門部胆管癌と胆嚢癌に差を認めなかった。Staging laparoscopy は腹膜転移と肝転移の多くを診断できたが、局所進展の診断が困難であった。Staging laparoscopy は胆嚢癌症例の 48%に対して切除不能と診断し不要な開腹手術を回避したが、肝門部胆管癌では 25%に留まった。しかし、肝門部胆管癌の内、T2/T3 症例では 36%であり、T1 症例(9%)に比べて高率であった。
	結論	Laparoscopy は胆嚢癌症例と肝門部胆管癌の切除不能例の多くを診断可能であり、不必要な開腹手術をさけ、在院日数を短縮する。画像診断で切除可能と判断される胆嚢癌全例と T2/T3 の肝門部胆管癌に対して術前 staging laparoscopy を施行すべきである。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	
	レビューワーコメント	肝門部胆管癌および胆嚢癌における切除不能因子が明確に規定されている。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝門部胆管癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Forty consecutive resections of hilar cholangiocarcinoma with no postoperative mortality and no positive ductal margins: Results of a prospective study	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ16	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 6 ）	
	Pubmed ID	15213624	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg	
	雑誌 ID		
	巻	240	
	号	1	
	ページ	95-101	
	ISSN ナンバー	0003-4932	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Jan 2004	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kondo S	Department of Surgical Oncology, Hokkaido University Graduate School of Medicine
	その他著者 1	Hirano S	
	その他著者 2	Ambo Y	
	その他著者 3	Tanaka E	
	その他著者 4	Okushiba S	
	その他著者 5	Morikawa T	
	その他著者 6	Katoh H	
	その他著者 7		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	肝門部胆管癌に対する外科治療戦略の評価
	データソース	対象：肝門部胆管癌切除例 40 例 研究施設：北海道大学附属病院 研究期間：1999 年 1 月から 2002 年 12 月
	研究の選択	治療戦略に基づいた外科切除
	データ抽出	術後合併症、在院日数、長期予後
	主な結果	在院死 0%、術後合併症 48%で、術後肝不全なし。病理組織診断では全例が胆管断端陰性、2 例が肝動脈剥離面陽性。3 年生存率及び生存期間(median)は 40%及び 27 ヵ月。Bismuth III, IV 症例は Bismuth I, II 症例に比べ、また右葉切除症例はその他の術式に比べ予後良好であった。血管合併切除例(n = 14、門脈 8 例、肝動脈 8 例、門脈+肝動脈 2 例)の予後は非合併切除例と有意差なし。単変量解析では肝切除術式、histopathologic grade、Bismuth 分類、肝動脈合併切除、UICC stage が有意な予後因子であった。
	結論	新たな治療戦略に基づいた周術期管理と術式選択により、術死 0、胆管断端陽性 0 を達成した。しかし、長期予後の改善は認められなかった。Bismuth I, II 症例に対する肝右葉切除を含めた新たな戦略の追加が必要と考えられる。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	
	レビューワーコメント	安全性と治癒切除を追求した肝門部胆管癌に対する外科治療戦略に基づいて、肝動脈合併切除 8 例を含む積極的外科切除を施行し、術死 0、胆管断端陽性 0 を達成している。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆道癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Two hundred forty consecutive portal vein embolizations before extended hepatectomy for biliary cancer: Surgical outcome and long-term follow-up	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （1）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ17	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 6 ）	
	Pubmed ID	16495702	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg	
	雑誌 ID		
	巻	243	
	号	3	
	ページ	364-372	
	ISSN ナンバー	pISSN: 0003-4932 eISSN: 1528-1140	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2006	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Nagino M	Nagoya University
	その他著者 1	Kamiya J	
	その他著者 2	Nishio H	
	その他著者 3	Ebata T	
	その他著者 4	Arai T	
	その他著者 5	Nimura Y	
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	胆道癌に対する大量肝切除術前の門脈塞栓術（PVE）の臨床的有用性を評価する
	データソース	1991.1－2005.5 に名古屋大学腫瘍外科で肝右葉切除以上または左三区域切除を予定して術前に PVE を施行した胆道癌 240 例
	研究の選択	Retrospective cohort study
	データ抽出	手術関連死亡率、術後遠隔成績
	主な結果	実際に大量肝切除を行った 193 例（胆管癌 132 例、胆嚢癌 61 例）の術後在院死亡率は 8.8%。胆管癌症例は 4.5%で胆嚢癌症例の 18%より有意に低く、肝切除率が 50%以下で PVE を行わなかった胆管癌 136 例の術後在院死亡率 3.7%と同様であり、遠隔成績も同等であった（5 年生存率 26.8%：27.6%）。
	結論	大量肝切除を予定する進行胆道癌症例では、PVE が手術の安全性を増す可能性がある。
	備考	術前 PVE の世界最多症例シリーズ。特に胆道癌症例では他の報告の 6-10 倍の症例数。
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	近藤 哲
	レビューワーコメント	術前 PVE を用いた胆道癌手術成績の基準となる。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝細胞癌、転移性肝癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Portal vein embolization before right hepatectomy: Prospective clinical trial	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ17	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺｰﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 4 ）	
	Pubmed ID	12560779	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg	
	雑誌 ID		
	巻	237	
	号	2	
	ページ	208-217	
	ISSN ナンバー	pISSN: 0003-4932 eISSN: 1528-1140	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2003	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Farges O	Hospital Beaujon, France
	その他著者 1	Belghiti J	
	その他著者 2	Kianmanesh R	
	その他著者 3	Regimbeau JM	
	その他著者 4	Santoro R	
	その他著者 5	Vilgrain V	
	その他著者 6	Denys A	
	その他著者 7	Sauvanet A	
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の６項目	目的	術前 PVE によってもたらされる残存予定肝の肥大が、肝右葉切除術後の合併症に与える影響を評価する。
	データソース	1998.11-2000.12 に Beaujon Hospital で肝右葉切除を予定した 55 例（肝細胞癌 28 例、転移性肝癌 25 例、肝内胆管癌 2 例）。
	研究の選択	Prospective non-randomized clinical trial（PVE 施行 27 例 vs 非施行 28 例）
	データ抽出	術後在院死亡率、術後合併症の頻度・性質、輸血量、術後の肝胆道系酵素値、ICU 滞在期間、入院期間
	主な結果	正常肝の 27 症例では差はなかったが、慢性肝疾患 28 症例では PVE 施行群において有意に術後合併症が少なく、ICU 滞在期間、入院期間も短かった。
	結論	慢性肝疾患症例では術前の PVE は肝右葉切除後の合併症を減少させた。
	備考	術前 PVE の有用性を検討した唯一のエビデンスレベル III の研究。I・II の研究は皆無。
レビューワーコメント	レビューワー氏名	近藤　哲
	レビューワーコメント	胆道癌を対象としたエビデンスレベル I-III の研究はない。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	黄疸肝	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Logistic regression and discriminant analyses of hepatic failure after liver resection for carcinoma of the biliary tract	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （1）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ18	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺｰﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	8511922	
	医中誌 ID		
	雑誌名	World J Surg	
	雑誌 ID		
	巻	17	
	号	2	
	ページ	250-255	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （1）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （2）	
	発行年月	1993	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Nagino M	Nagoya University
	その他著者 1	Nimura Y	
	その他著者 2	Hayakawa N	
	その他著者 3	Kamiya J	
	その他著者 4	Kondo S	
	その他著者 5	Sasaki R	
	その他著者 6	Hamajima N	
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の６項目	目的	胆道癌に対する肝切除後肝不全の発生因子を検討する。
	データソース	胆道癌(胆管癌・胆嚢癌)肝切除患者、名古屋大学、1980 年 1 月から 1990 年 12 月までの 84 例
	研究の選択	術後肝不全発症の有無
	データ抽出	術前・術中・術後因子(患者年齢・性別・疾患・胆管炎の有無・門脈浸潤の有無・結成アルブミン値・総コレステロール値・コリンエステラーゼ値・総ビリルビン値・血小板数・プロトロンビン時間・ICG 消失率・経口糖負荷試験・肝切除率・門脈合併切除再建の有無・PD 併施の有無・手術時間・出血量)における術後肝不全発症例と非発症例の比較
	主な結果	単変量並びに多変量解析の結果から経口糖負荷試験の linear pattern・胆管炎の有無・PD 併施の有無・ICG 消失率が選択された。さらにこの 4 つの因子と肝切除率から判別式を作成した。Sensitivity 96%, specificity 83.1%, accuracy 86.9%となった。
	結論	肝不全を回避するという観点からは一定の指標となると考えられるが、判別式を遵守すると切除対象症例の制限を惹起することになる。現在は門脈塞栓など新たに安全に拡大肝切除が施行可能となっており、これらの因子と対象症例数をもっと増やすことにより、新たによりエビデンスのある結論が導き出されると考えられる。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	吉留博之
	レビューワーコメント	閉塞性黄疸を伴う症例における肝切除後肝不全のリスク症例に一定の指標を与える結果である。肝切除の安全性の向上した現在、判別式等再考し、前向き試験によりさらなるエビデンスのある結果が得られると考えられる。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆管癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Evaluation of bile duct resection for middle bile duct cancer	
	論文の日本語タイトル	中部胆管癌に対する胆管切除術の評価	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ19	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 7 ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	1998187443	
	雑誌名	胆道	
	雑誌 ID		
	巻	12	
	号	2	
	ページ	143-148	
	ISSN ナンバー	0914-0077	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 1 ）	
	発行年月	1998 年 2 月	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	木下 壽文	久留米大学医学部第２外科
	その他著者 1	中山 和道	
	その他著者 2	今山 裕康	
	その他著者 3	蓮田 啓	
	その他著者 4	奥田 康司	
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の６項目	目的	中部胆管癌に対する胆管切除術の適応
	データソース	対象：中部胆管癌症例 47 例 研究施設：久留米大学医学部第２外科 研究期間：1965 年 1 月から 1996 年 10 月
	研究の選択	胆管切除 vs 膵頭十二指腸切除
	データ抽出	累積生存率
	主な結果	胆管切除術の非治癒切除因子は hw 因子:61.5%, dw 因子:76.9%, ew 因子:69.2%, n 因子:30.8%で、dw 因子が最も多く、n 因子も高率であった。根治度別累積生存率では治癒切除と非治癒切除との間に有意差を認めた。胆管切除後 3 年以上の長期生存例は 7 例で、肉眼型は乳頭型 1 例、乳頭浸潤型 2 例、結節型 3 例、特殊型 1 例で、全例治癒切除であった。累積生存率を胆管切除と膵頭十二指腸切除で比較すると有意差はなかった。
	結論	胆管切除術の適応は、肉眼型は乳頭型または結節型で、リンパ節転移のない Stage I 症例で、特に高齢者や全身状態不良例には有用な術式と考えられる。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	木村 文夫
	レビューワーコメント	胆管癌に対する胆管切除術の適応と長期予後に関する報告は極めて少ない。本論文は retrospective study ではあるが貴重な報告である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝外胆管癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Actual long-term outcome of extrahepatic bile duct cancer after surgical resection	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ19	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 7 ）	
	Pubmed ID	15621994	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg	
	雑誌 ID		
	巻	241	
	号	1	
	ページ	77-84	
	ISSN ナンバー	0003-4932	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2005 年 1 月	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Jang JY	Department of Surgery, Seoul National University College of Medicine
	その他著者 1	Kim SW	
	その他著者 2	Park DJ	
	その他著者 3	Ahn YJ	
	その他著者 4	Yoon YS	
	その他著者 5	Choi MG	
	その他著者 6	Suh KS	
	その他著者 7	Lee KU	
	その他著者 8	Park YH	
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の６項目	目的	肝外胆管癌の外科切除後の実質的長期成績の分析
	データソース	対象：肝外胆管癌切除例 151 例、非切除例 131 例 研究施設：Seoul National University College of Medicine 研究期間：1986 年 1 月 1 日から 1997 年 12 月 31 日
	研究の選択	肝切除+胆管切除(HBR) vs 胆管切除(BDR) vs 膵頭十二指腸切除(PD)、予後因子
	データ抽出	長期成績
	主な結果	切除例の 32.5%(49/151)が 5 年以上生存し、非切除例では 5 年生存はなかった。5 年生存率は HBR 47.8% (11/23), BDR 28.0% (7/25), PD 30.1% (31/103)であった(p = 0.083)。多変量解析による予後因子の解析では組織所見(分化度)とリンパ節転移が有意な因子であった。5 年以上生存例のうち 7 例が術後 5 年で再発し、8 例が術後 5 年以降に再発した。したがって、手術により“治癒”出来た症例は実際には 19.2%以下で、5 年生存率をかなり下まわる。
	結論	肝外胆管癌の外科治療では切除断端陰性目指すべきであり、進行癌であっても、積極的な外科切除によりある程度の有効性が得られる。術後 5 年以降の再発が少なからず起こり、“治癒”と言うには長期の経過観察が必要である。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	木村 文夫
	レビューワーコメント	術式の選択基準が明確である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄
基本情報	対象疾患	肝門部胆管癌
	タイプ	臨床専門情報
タイトル情報	論文の英語タイトル	
	論文の日本語タイトル	尾状葉合併切除の成績と予後
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （1）
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ20
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （8）
	Pubmed ID	
	医中誌 ID	
	雑誌名	胆と膵
	雑誌 ID	
	巻	17
	号	12
	ページ	1247-1251
	ISSN ナンバー	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （1）
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （1）
	発行年月	1996
著者情報		氏名 / 所属機関
	筆頭著者	都築俊治 / 慶応大学
	その他著者 1	上田政和
	その他著者 2	杉浦芳章
	その他著者 3	
	その他著者 4	
	その他著者 5	
	その他著者 6	
	その他著者 7	
	その他著者 8	
	その他著者 9	
	その他著者 10	

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	
	データソース	
	研究の選択	
	データ抽出	
	主な結果	肝門部胆管癌切除 83 例を検討した。治癒切除を得た 52 例の肝門部胆管癌において、尾状葉合併切除を施行した 35 例と、しなかった 17 例を比較し、5 年生存率でそれぞれ４４％と１９％で有意に尾状葉合併切除が良好であった。
	結論	肝門部胆管癌の長期生存を得るために尾状葉切除の有用性を検討した。尾状葉切除は長期生存を得るために必要である
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	山本雅一、太田岳洋
	レビューワーコメント	関連した数施設でおこなった肝門部胆管癌に対し、尾状葉切除を施行した症例としなかった症例の成績を retrospective に比較検討している。RCT ではなく論文としてのエビデンスレベルは低いが症例数は比較的多い。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄
基本情報	対象疾患	肝門部胆管癌
	タイプ	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Hepatic segmentectomy with caudate lobe resection for bile duct carcinoma of the hepatic hilus
	論文の日本語タイトル	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （1 ）
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ20
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （8 ）
	Pubmed ID	
	医中誌 ID	
	雑誌名	World J Surg
	雑誌 ID	
	巻	14
	号	4
	ページ	535-543
	ISSN ナンバー	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ ）
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （2 ）
	発行年月	1990
著者情報		氏名 / 所属機関
	筆頭著者	Nimura Y / Nagoya University
	その他著者 1	Hayakawa N
	その他著者 2	Kamiya J
	その他著者 3	
	その他著者 4	
	その他著者 5	
	その他著者 6	
	その他著者 7	
	その他著者 8	
	その他著者 9	
	その他著者 10	

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	肝門部胆管癌の治療成績
	データソース	
	研究の選択	
	データ抽出	
	主な結果	66 例の肝門部胆管癌に対して 55 例に切除を行い、46 例に尾状葉合併切除を行った。45 例中 44 例に組織学的な尾状葉浸潤を認めた。46 例に治癒切除を行い、43 例が耐術した。43 例の 3 年、5 年生存率は、それぞれ 55.1%、40.5%であった。
	結論	肝門部胆管癌においては術前の癌の進展度診断に応じて治癒切除が得られるような術式を選択しなければならない。その際に尾状葉切除は最低限必要な肝切除である。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	
	レビューワーコメント	本論文は一施設における肝門部胆管癌切除例の成績を検討した症例集積研究である。尾状葉切除例と非切除例を比較検討したものではないが、術式として肝葉切除等に加えて尾状葉合併切除を積極的に行い。良好な治癒切除率と成績を得ている。尾状葉合併切除の必要性に関して強く主張した論文である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝門部胆管癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Aggressive surgical approaches to hilar cholangiocarcinoma: Hepatic or local resection?	
	論文の日本語タイトル	尾状葉合併切除の成績と予後	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （1）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ20	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （8）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	123	
	号	2	
	ページ	131-136	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （1）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （1）	
	発行年月	1998	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Miyazaki M	First Department of Surgery, School of Medicine, Chiba University
	その他著者 1	Ito H	
	その他著者 2	Nakagawa K	
	その他著者 3	Ambiru S	
	その他著者 4	Shimizu H	
	その他著者 5	Shimizu Y	
	その他著者 6	Kato A	
	その他著者 7	Nakamura S	
	その他著者 8	Omoto H	
	その他著者 9	Nakajima N	
	その他著者 10	Kimura F	

レビュー研究の6項目	目的	
	データソース	
	研究の選択	
	データ抽出	
	主な結果	肝門部胆管癌切除 76 例を肝門部胆管切除単独 11 例と尾状葉を含む肝切除を付加した 65 例に分けて検討した。肝門部胆管切除は治癒切除率が 45%でで治癒切除を得た 52 例の肝門部胆管癌において、尾状葉合併切除を施行した 35 例と、しなかった１７例を比較し、５年生存率でそれぞれ４４%と１９%で有意に尾状葉合併切除が良好であった。
	結論	肝門部胆管癌の長期生存を得るために尾状葉切除の有用性を検討した。尾状葉切除は長期生存を得るために必要である
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	山本雅一、太田岳洋
	レビューワーコメント	一施設における肝門部胆管癌の切除例の検討である。肝門部胆管癌に対する肝門部胆管切除と尾状葉切除を含む肝切除を付加した

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝門部胆管癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Hepatectomy with portal vein resection for hilar cholangiocarcinoma: Audit of 52 consecutive cases	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1. 有り 2. 無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ 21	
書誌情報	研究デザイン	1. ﾚﾋﾞｭｰ 2. ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3. ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4. 非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5. 非比較試験 6. ｺﾎｰﾄ研究 7. 症例対照研究 8. 症例集積 9. 症例報告 10. 横断研究 11. 比較観察研究 12. 非比較観察研究 13. その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	14578735	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg	
	雑誌 ID		
	巻	238	
	号	5	
	ページ	720-727	
	ISSN ナンバー	0003-4932	
	雑誌分野	1. 医学 2. 歯学 3. 看護 4. その他 （ 1 ）	
	原本言語	1. 日本語 2. 英語 3. ドイツ語 4. その他 （ 2 ）	
	発行年月	2003	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Ebata T	Division of Surgical Oncology, Department of Surgery, Nagoya University Graduate School of Medicine, Nagoya, Japan
	その他著者 1	Nagino M	
	その他著者 2	Kamiya J	
	その他著者 3	Uesaka K	
	その他著者 4	Nagasaka T	
	その他著者 5	Nimura Y	
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		

レビュー研究の 6 項目	目的	肝門部胆管癌での生存率からみた門脈切除の意義、門脈浸潤の程度と予後の関係を明らかにする.
	データソース	
	研究の選択	
	データ抽出	
	主な結果	肉眼的治癒切除をおこなった肝門部胆管癌肝切除160例中、門脈合併切除は52例に対して行われた. 門脈切除の有無と術死率には、有意差はなかった. 門切例のうち、16例 (30.8%)では、組織学的門脈浸潤を認めなかった. 5生率は門切例で有意に不良であった (9.9%, 36.8%; P<0.0001) 組織学的門脈浸潤の有無は生存期間に影響しなかった。多変量解析では、組織学的分化度、リンパ節転移と肉眼的門脈浸潤が独立した予後因子であった.
	結論	肉眼的門脈浸潤は生存に負の影響を及ぼす. 門脈切除を伴う肝切除術により、一部の進行した肝門部胆管癌患者で長期生存が可能となる。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	天野穂高
	レビューワーコメント	日本を代表する施設における、肝門部胆管癌門脈切除症例の検討である.

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝門部胆管癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Portal vein resection for hilar cholangiocarcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ21	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	16875081	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Am Surg	
	雑誌 ID		
	巻	72	
	号	7	
	ページ	599-604 (Discussion 604-605)	
	ISSN ナンバー	0003-1348	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2006	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Hemming AW	University of Florida Center for Hepatobiliary Disease, College of Medicine, Department of Surgery, Gainesville, Florida 32610-0286, USA
	その他著者 1	Kim RD	
	その他著者 2	Mekeel KL	
	その他著者 3	Fujita S	
	その他著者 4	Reed AI	
	その他著者 5	Foley DP	
	その他著者 6	Howard RJ	
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	肝門部胆管癌の手術では、門脈切除により治癒切除の可能性が高まるが、技術的にはより困難であり、手術の危険性が増す可能性がある．門脈切除を行った肝門部胆管癌について検討した．
	データソース	
	研究の選択	
	データ抽出	
	主な結果	治癒切除を行った 60 例の肝門部胆管癌切除例(肝切 59 例、胆管切除 1 例、4 例の膵頭十二指腸切除を含む)のうち 26 例に門脈合併切除を施行した．門脈切除の有無による mortality、断端陽性の頻度、生存率(5 年生存率：門脈切除有り 39%、門脈切除無し 41%)に有意差はなかった．多変量解析では、断端陽性だけが予後改善に関与する因子であった．
	結論	門脈切除は安全であり、非切除と比較すると長期生存の可能性がある．
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	天野穂高
	レビューワーコメント	肝門部胆管癌での門脈切除の安全性、予後についての報告である．

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝門部胆管癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Aggressive preoperative, management and extended surgery for hilar cholangiocarcinoma: Nagoya experience	
	論文の日本語タイトル	肝門部胆管癌に対する積極的な術前処置と拡大手術、名古屋大学での経験	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ22 胆管癌切除後の予後にどのような因子が関わってくるか？	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （13）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Hepatobiliary Pancreat Surg	
	雑誌 ID		
	巻	7	
	号		
	ページ	155-162	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （2 ）	
	発行年月	2000	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Nimura Y	Nagoya University
	その他著者 1	Kamiya J	
	その他著者 2	Kondo S	
	その他著者 3	Nagino M	
	その他著者 4	Uesaka K	
	その他著者 5	Uesaka K	
	その他著者 6	Sano T	
	その他著者 7	Yamamoto H	
	その他著者 8	Hayakawa N	
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	単一施設での肝門部胆管癌の治療成績を検討した
	データソース	名古屋大学症例
	研究の選択	
	データ抽出	肝門部胆管癌治療症例
	主な結果	1977 年から 1997 年までの肝門部胆管癌 142 例のうち、治癒切除は 108 例(61%)であった。100 例に対して各種肝切除を施行した。術死 6%、在院死は 9%であった。43 例に門脈合併切除を施行した。肝膵同時切除は 16 例に施行した。治癒切除 108 例中 58 例に癌再発がみられた。治癒肝切除 100 例の 3,5,10 年生存率は 43%、26%、19%であった。40 例のリンパ節転移陽性例の 3,5,10 年生存率は 27%、14%、7%であった。神経浸潤がみられた 84 例での 3,5,10 年生存率は 34%、21%、13%であった。これらの予後は非切除例より有意に良好であった。
	結論	肝門部胆管癌では術前の積極的処置による治癒切除が予後向上に重要である。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	萱原正都
	レビューワーコメント	単一施設での retrospective な検討ではあるが、リンパ節転移の有無と神経浸潤の有無が重要な予後因子であると述べている。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝門部胆管癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Improvement surgical results for hilar cholangiocarcinoma with procedures including major hepatic resection	
	論文の日本語タイトル	肝切除を伴う肝門部門部胆管癌に対する手術成績の向上	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ22	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （13 ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg	
	雑誌 ID		
	巻	230	
	号	5	
	ページ	663-671	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （2 ）	
	発行年月	1999	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kosuge T	National Cancer Center Hospital
	その他著者 1	Yamamoto J	
	その他著者 2	Shimada K	
	その他著者 3	Yamasaki S	
	その他著者 4	Makuuchi M	Tokyo University
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の6項目	目的	肝門部胆管癌拡大手術の長期予後を解析する
	データソース	国立がんセンター症例
	研究の選択	
	データ抽出	国立がんセンターで肝葉切除以上の肝門部胆管癌症例
	主な結果	1980 年から 1997 年までに肝門部胆管癌 107 例の解析をした。65 例に切除を行い、52 例に対して肝葉切除以上の肝切除を施行した。臨床病理学的予後因子の単変量、多変量解析をした。60%の症例が stage Ⅳであった。92%の症例に肝葉切除を行い、最近の 35 例では在院死をみなかったが、初期では 6 例の死亡例があった。治癒切除の予後は良好であった。5 年生存率は 34.8%で癌遺残をみない症例では 51.6%の 5 年生存率をみた。リンパ節転移は 44.6%の症例にみられ、所属リンパ節にのみ転移をみた症例は転移陰性例と予後の差をみなかった。切除後の予後因子では胆嚢への浸潤、リンパ節転移、癌遺残の有無、組織型、性別が重要であった。
	結論	進行肝門部胆管癌では肝葉切除と系統的リンパ節郭清が予後向上に寄与する可能性があり、あまり進行していない症例では切離面に癌遺残を認めなければ縮小手術でも十分可能であると考えられた。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	萱原正都
	レビューワーコメント	肝葉切除以上の肝門部胆管癌症例を臨床病理学的に解析し、多変量解析を用いて予後因子を分析している論文である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	中下部胆管癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Role of nodal involvement and periductal soft tissue margin for middle and distal bile duct cancer	
	論文の日本語タイトル	中下部胆管癌におけるリンパ節と剥離面の意義	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ22	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （13）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg	
	雑誌 ID		
	巻	229	
	号	1	
	ページ	76-83	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （2 ）	
	発行年月	1999	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kayahara M	Kanazawa University
	その他著者 1	Nagakawa T	
	その他著者 2	Ohta T	
	その他著者 3	Kitagawa H	
	その他著者 4	Tajima H	
	その他著者 5	Miwa K	
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の6項目	目的	中下部胆管癌の予後因子を解析する
	データソース	金沢大学症例
	研究の選択	
	データ抽出	単一施設での症例
	主な結果	中下部胆管癌 50 例を臨床病理学的に検討した。中部胆管癌が 14 例、下部胆管癌が 36 例で、それぞれのリンパ節転移率は 57%、71%であった。胆管下部リンパ節と上膵頭後部リンパ節の転移が最も高率であった。神経叢浸潤は 20%にみられた。リンパ節転移陰性例の 5 年生存率は 65%、陽性例のそれは 21%であった。多変量解析では切離、剥離面の癌遺残の有無とリンパ節転移の有無がもっとも重要な予後因子であった。
	結論	切離、剥離面の癌遺残の有無とリンパ節転移の有無は中下部胆管癌の独立した予後因子である。広範なリンパ節郭清は中下部胆管癌に必要であり、とくに中部胆管癌では門脈切除を含めた肝十二指腸間膜の郭清が重要である。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	萱原正都
	レビューワーコメント	Retrospective な検討であるが中下部胆管癌の予後因子を解析し、多変量解析を用い、リンパ節転移と胆管周囲剥離面の癌遺残の有無が重要な予後因子であると解析した論文である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆嚢癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Early gallbladder carcinoma does not warrant radical resection.	
	論文の日本語タイトル	早期胆嚢癌に対する拡大切除は不要である	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ23	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (7)	
	Pubmed ID	11350438	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Br J Surg	
	雑誌 ID		
	巻	88	
	号	5	
	ページ	675-678	
	ISSN ナンバー	0007-1323	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	May 2001	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Wakai T	Department of Surgery, Niigata University School of Medicine
	その他著者 1	Shirai Y	
	その他著者 2	Yokoyama N	
	その他著者 3	Watanabe H	Department of Pathology, Niigata University School of Medicine
	その他著者 4	Hatakeyama K	Department of Surgery, Niigata University School of Medicine
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の 6 項目	目的	固有筋層浸潤のある胆嚢癌(pT1b)は局所病変であるか，また，拡大切除が必要であるかを検討する．
	データソース	1981 年から 1999 年に著者の施設（関連施設を含む）で切除された胆嚢癌 622 症例．
	研究の選択	外科切除成績
	データ抽出	所属リンパ節の転移の有無，脈管浸潤の有無，予後
	主な結果	pT1b 症例 25 例の検討で 147 個の所属リンパ節に micrometastasis を含めて転移はなく，リンパ管浸潤を 1 例のみに認める以外は静脈浸潤や神経周囲浸潤は 1 例も認めなかった．全体の 10 年生存率は 87%であり，単純胆嚢摘出術と拡大切除の検討で両者に予後の差はなかった．拡大切除を行った 2 例に遠隔転移による死亡を認めた．
	結論	ほとんどの pT1b 症例は局所病変である．術前に pT1b と診断できることは稀であるが，単純胆嚢摘出術後に pT1b と診断された胆嚢癌に追加切除は不要である．
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	近藤　哲
	レビューワーコメント	詳細な病理学的検索に基づいて pT1b（mp 浸潤）胆嚢癌の病態を検討した論文．腹腔鏡下胆嚢摘出術による根治切除の可能性を論ずるのに不可欠なデータである．

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆嚢癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Laparoscopic cholecystectomy for gallbladder carcinoma: Results of a Japanese survey of 498 patients.	
	論文の日本語タイトル	胆嚢癌に対する腹腔鏡下胆嚢摘出術：日本における 498 例の調査結果	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ23	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (7)	
	Pubmed ID	12140616	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Hepatobiliary Pancreat Surg	
	雑誌 ID		
	巻	9	
	号	2	
	ページ	256-260	
	ISSN ナンバー	0944-1166	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Ouchi K	Department of Surgery, Miyagi Cancer Center Hospital
	その他著者 1	Mikuni J	
	その他著者 2	Kakugawa Y	
	その他著者 3	Organizing Committee, The 30th Annual Congress of the Japanese Society of Biliary Surgery	
	その他著者 4		
	その他著者 5		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の 6 項目	目的	腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行された胆嚢癌症例の長期予後を判定する．胆嚢癌治療における腹腔鏡下胆嚢摘出術の役割，積極的追加切除の有効性を明らかにする．
	データソース	日本胆道学会所属 253 施設に対する質問表による調査．2000 年 3 月までの症例．
	研究の選択	外科切除成績
	データ抽出	術前・術後診断，術中胆嚢損傷の有無，追加切除の有無，予後，再発
	主な結果	腹腔鏡下胆嚢摘出術を行った胆嚢癌症例の 5 年累積生存率は pT1a，pT1b，pT2，pT3，pT4 でそれぞれ 99%，95%，70%，20%，0%．術中胆嚢損傷は 20%に発生し，非損傷例と比較して明らかに予後不良 ($p<0.01$)．追加切除は 48%に行われ，pT2，pT3 症例で追加切除による予後改善効果があったが pT1 および pT4 症例では予後は改善しなかった．
	結論	pT2，pT3 症例に対する追加切除を行うならば，腹腔鏡下胆嚢摘出術による胆嚢癌術後の長期予後は開腹胆嚢摘出術と比較して劣っていないであろう．腹腔鏡下胆嚢摘出術で切除された pT1 症例には追加切除が不要である．腹腔鏡下胆嚢摘出術では術中の胆汁漏出を防ぐことが重要である．
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	近藤　哲
	レビューワーコメント	胆嚢癌に対する腹腔鏡下胆嚢摘出術の予後を調査した多施設症例の集計として貴重．胆嚢損傷例や追加切除例に関するデータが豊富である．

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆嚢癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Laparoscopic cholecystectomy for gallbladder carcinoma: Results of a Japanese survey of 498 patients	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ24	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 7 ）	
	Pubmed ID	12140616	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Hepatobiliary Pancreat Surg	
	雑誌 ID		
	巻	9	
	号	2	
	ページ	256-260	
	ISSN ナンバー	0944 - 1166	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Sept 2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Ouchi K	Department of Surgery, Miyagi Cancer Center Hospital
	その他著者 1	Mikuni J	
	その他著者 2	Kakugawa Y	
	その他著者 3	Organizing Committee, The 30th Annual Congress of the Japanese Society of Biliary Surgery	
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の６項目	目的	胆嚢癌における腹腔鏡下胆嚢摘出と追加切除の意義
	データソース	対象：腹腔鏡下胆嚢摘出術が施行された胆嚢癌 498 例 研究施設：日本胆道外科研究会アンケートによる 253 施設の調査 研究期間：2000 年 3 月以降
	研究の選択	腹腔鏡下胆嚢摘出術により摘出された胆嚢癌の腫瘍の進行度別、追加切除別、胆嚢損傷の有無別予後
	データ抽出	長期予後
	主な結果	腹腔鏡下胆嚢摘出術により摘出された胆嚢癌のうち、pT2 では、201 例中 153 例（76.1%）にリンパ節郭清を伴った追加切除がなされたが、追加切除群の予後は、追加切除施行しなかった胆嚢摘出のみ群(n=48)に比し、良い傾向を認めたがわずかに有意差には至らなかった（p=0.051）しかしながら、pT3 例 の追加切除群(n=30)は、胆嚢摘出のみの群(n=10)に比較し、有意に予後は良好であった。pT 1，pT 4 では、それぞれ両群間に有意差は認めなかった。また、腹腔鏡下胆嚢摘出術中に胆嚢を損傷し、胆汁が腹腔内にこぼれた症例の予後は、胆嚢損傷がなかった例に比較し、予後は不良であった。
	結論	腹腔鏡下胆嚢摘出術により摘出された pT2, pT3 胆嚢癌でも適切な二期的根治手術がなされれば、通常の根治切除術と同等の成績がえられるが、術中には、腹腔への胆汁のこぼれのないよう胆嚢損傷には細心の注意がなされねばならない。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	清水宏明、宮崎勝
	レビューワーコメント	253 施設へのアンケート調査にて、腹腔鏡下胆嚢摘出術が施行された胆嚢癌 498 例を集積し、腫瘍の進行度別、追加切除別に予後を検討し、pT2, pT3 胆嚢癌での二期的根治手術の有用性を明らかにした意義のある論文と考える。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆嚢癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Perineural invasion has a negative impact on survival of patients with gallbladder carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ25	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 7 ）	
	Pubmed ID	12190678	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Br J Surg	
	雑誌 ID		
	巻	89	
	号	9	
	ページ	1130-1136	
	ISSN ナンバー	0007-1323	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Sept 2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Yamaguchi R	Department of Surgery, Division of Surgical Oncology, Nagoya University Graduate School of Medicine
	その他著者 1	Nagino M	
	その他著者 2	Oda K	
	その他著者 3	Kamiya J	
	その他著者 4	Uesaka K	
	その他著者 5	Nimura Y	
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の６項目	目的	神経周囲浸潤が胆嚢癌の切除後予後因子
	データソース	対象：胆嚢癌治癒切除例 68 例(ss 癌 30 例, se, si 癌 21 例) 研究施設：名古屋大学医学部付属病院第一外科 研究期間：1989 年 1 月から 2000 年 6 月
	研究の選択	予後因子（組織型、深達度、リンパ節転移、神経周囲浸潤、肝外胆管浸潤、脈管浸潤、Stage、他）の単変量・多変量解析（Cox 比例ハザードモデル）
	データ抽出	長期予後
	主な結果	神経周囲浸潤は対象症例の 71%(48/68)、肝外胆管浸潤陽性症例の 96%(44/46)に認められた。組織学的所見の中で、肝外胆管浸潤が神経周囲浸潤と最も強い関連を認めた。神経周囲浸潤を伴う症例の 5 年生存率(7%)は神経周囲浸潤を認めない症例(72%)に比較して有意に低かった($P < 0.001$)。単変量解析による予後因子の解析では組織型、リンパ節転移、神経周囲浸潤、脈管浸潤、肝外胆管浸潤、深達度、Stage が有意な因子で、多変量解析では神経周囲浸潤とリンパ節転移が有意な因子であった。
	結論	神経周囲浸潤は進行胆嚢癌では高頻度に認められ、有意な予後不良因子である。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	千葉大学 木村 文夫
	レビューワーコメント	進行胆嚢癌の肝十二指腸間膜浸潤を神経周囲浸潤と肝外胆管浸潤の観点から検討し、多変量解析により、神経周囲浸潤がリンパ節転移とともに胆嚢癌の切除後予後因子であることを明らかにしている。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆嚢癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	A study of clinico-pathological factors affecting prognosis in resected cases of gallbladder carcinoma	
	論文の日本語タイトル	胆嚢癌の切除後予後に及ぼす臨床病理学的因子に関する検討	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ25	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 7 ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	胆道	
	雑誌 ID		
	巻	16	
	号	2	
	ページ	100-107	
	ISSN ナンバー	0914-0077	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 1 ）	
	発行年月	Feb 2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	太田　仁	順天堂大学医学部第２外科
	その他著者 1	別府　倫兄	
	その他著者 2	二川　俊二	
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の６項目	目的	胆嚢癌の切除後予後因子の検討
	データソース	対象：ss 以上の胆嚢癌切除例 51 例(ss 癌 30 例, se, si 癌 21 例) 研究施設：順天堂大学医学部第２外科 研究期間：1979 年 9 月から 2001 年 3 月
	研究の選択	予後因子（深達度、根治度、リンパ節転移、Stage、肉眼形態、占拠部位、binf、binf、ly、v）の単変量・多変量解析（Cox 比例ハザードモデル）
	データ抽出	長期予後
	主な結果	治癒切除率は ss 癌 83.3%、se, si 癌 19.0%であり、治癒切除例の 5 年生存率が 55.2%であったのに対して、非治癒切除例では 3 年生存例を認めなかった。リンパ節転移の有無別 5 年生存率は N(-) 50.4%、N(+) 5.7%。binf(-)の 5 年生存率は 35.6%であるのに対し、binf(+)では 3 年生存を認めなかった。5 年以上長期生存の進行胆嚢癌症例は、いずれも治癒切除例で、binf は全例陰性、リンパ節転移陽性は n1(+)の 1 例のみであった。
	結論	単変量解析では深達度、根治度、リンパ節転移、肉眼形態、占拠部位、binf が有意な予後因子であり、多変量解析で根治度、リンパ節転移が有意な予後因子であった。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	千葉大学　木村　文夫
	レビューワーコメント	欧米の報告には binf に関する記載はほとんどない。この報告は、進行胆嚢癌の予後に及ぼす binf の影響を検討しており、多変量解析による予後因子の解析も評価される。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆嚢癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Lymph node spread from carcinoma of the gallbladder	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ25	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 7 ）	
	Pubmed ID	9264348	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	80	
	号	4	
	ページ	661-667	
	ISSN ナンバー	0008-543X	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Aug 1997	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Tsukada K	Department of Surgery, Niigata University School of Medicine
	その他著者 1	Kurosaki I	
	その他著者 2	Uchida K	
	その他著者 3	Shirai Y	
	その他著者 4	Oohashi Y	
	その他著者 5	Yokoyama N	
	その他著者 6	Watanabe H	
	その他著者 7	Hatakeyama K	
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の６項目	目的	胆嚢癌のリンパ節転移の検討
	データソース	対象：胆嚢癌切除例 111 例 研究施設：新潟大学附属病院 研究期間：1981 年から 1995 年
	研究の選択	胆嚢癌のリンパ節転移式(N1 vs N2)
	データ抽出	長期予後
	主な結果	pT1 胆嚢癌(n=15)には神経・脈管浸潤やリンパ節転移を認めなかった。pT2-4 胆嚢癌では 60/96 にリンパ節転移を認めた。リンパ節転移部位は胆管周囲リンパ節に最も多く、次いで胆嚢頭部リンパ節であった。pT3-4 胆嚢癌のリンパ節転移頻度(79%)と N1/N2 比(2.5)は pT2(各々46%, 0.6)に比較して有意に高値を示した。pT2-4 胆嚢癌の術後 5 年生存率は N0(66%)と N1(53%)では有意差を認めなかった。N2(16%)は N1 に比較して有意に低値を示したが、4 例の長期生存を認めた。
	結論	胆嚢癌の最初のリンパ節が胆管周囲リンパ節と胆嚢頭部リンパ節である。リンパ節転移の頻度は腫瘍の深達度に依存した。上記リンパ節のみの転移であれば、外科切除により 50%以上の症例がが治癒する。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	千葉大学　木村　文夫
	レビューワーコメント	胆嚢癌のリンパ節転移様式を含めて病理学的所見を詳細に検討しており、N1(+)はリンパ節郭清により治癒する可能性が高いことを明らかにしている。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳頭部癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Surgical strategy for carcinoma of the papilla of Vater based on the lymphatic flow and mode of recurrence	
	論文の日本語タイトル	乳頭部におけるリンパ節転移と再発に基づいた治療戦略	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ27	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (13)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	121	
	号	6	
	ページ	611-617	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	1997	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kayahara M	Kanazawa University
	その他著者 1	Nagakawa T	
	その他著者 2	Ohta T	
	その他著者 3	Kitagawa H	
	その他著者 4	Miyazaki I	
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の６項目	目的	乳頭部癌の進展様式から治療戦略を考察する
	データソース	金沢大学症例
	研究の選択	
	データ抽出	単一施設での症例
	主な結果	乳頭部癌 36 を臨床病理学的に検討した。リンパ節転移率は 42%であり、転移率の高いリンパ節は No.13b であった。No.14 リンパ節には 17%の症例で転移がみられた。胃周囲リンパ節への転移はみられなかった。腫瘍肉眼型とリンパ節転移とは強い相関がみられ、5 年生存率はリンパ節転移陰性では 74%であったが、転移陽性例では 31%であった。肉眼型と予後も相関し、腫瘤型の 5 年生存率は 75%、混在型では 49%、潰瘍型では 17%であった。再発はリンパ節転移、腫瘍肉眼型と相関をみた。
	結論	リンパ節転移は重要な予後因子であり、No.14 リンパ節を十分に郭清する幽門輪温存膵頭十二指腸切除が乳頭部癌には妥当な術式と考えられた。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	萱原正都
	レビューワーコメント	Retrospective な検討であるが乳頭部癌の予後因子を解析し、リンパ節転移と腫瘍肉眼型が重要な予後因子であると結論した論文である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳頭部癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Clinical significance of immunohistochemically detectable lymph node metastasis in adenocarcinoma of the ampulla of Vater	
	論文の日本語タイトル	乳頭部におけるリンパ節転移と再発に基づいた治療戦略	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ27	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (13)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Br J Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	93	
	号		
	ページ	221-225	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2006	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Mizuno T	Juntendo University
	その他著者 1	Ishizaki Y	
	その他著者 2	Ogura K	
	その他著者 3	Yoshimoto J	
	その他著者 4	Kawasaki S	
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の６項目	目的	乳頭部癌リンパ節転移の免疫組織学的検出の意義
	データソース	順天堂大学症例
	研究の選択	
	データ抽出	単一施設での症例
	主な結果	乳頭部癌 25 例の 326 個のリンパ節を検索した。抗サイトケラチン抗体（CAM5-2）を用いた検索では 5.5%のリンパ節転移が 9.5%に増加した。症例数でいえば 8 症例から 11 例に転移陽性例が増加した。免疫染色で転移陰性の症例は有意に予後良好であった。
	結論	従来の HE 染色によるリンパ節転移の検索に免疫組織学的検討を加えることに乳頭部癌の予後判定に新たな情報となる。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	萱原正都
	レビューワーコメント	免疫組織学的検索を加えることのより、リンパ節転移のより詳細な情報がえられ、これによる検索で転移陰性であれば予後良好であることを示した論文である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	膵癌、胆道癌	
	タイプ	化学療法と支持療法のランダム化比較試験	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Chemotherapy improves survival and quality of life in advanced pancreatic and biliary cancer	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ28	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 3 ）	
	Pubmed ID	8879373	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Oncol	
	雑誌 ID		
	巻	7	
	号	6	
	ページ	593-600	
	ISSNナンバー	0923-7534 (Print)	
	雑誌分野	①.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ ）	
	原本言語	1.日本語 ②.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ ）	
	発行年月	1996 Aug	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Glimelius B	University of Uppsala, Sweden
	その他著者 1	Hoffman K	
	その他著者 2	Sjoden PO	
	その他著者 3	Jacobsson G	
	その他著者 4	Sellstrom H	Sjukhuset, Sweden
	その他著者 5	Enander LK	Centralsjukhuset, Sweden
	その他著者 6	Linne T	
	その他著者 7	Svensson C	Huddinge University Hospital, Sweden

ﾚﾋﾞｭｰ研究の 6 項目	目的	化学療法が進行膵癌と胆道癌の患者の生存と QOL を改善するかどうかをランダム化比較試験により評価した
	データソース	多施設共同、1991 年 1 月－1995 年 2 月
	研究の選択	主な選択基準：組織診断された切除不能膵癌または胆道癌患者、前化学療法歴なし、KPS≧50、臓器機能保持
	データ抽出	評価項目: 全生存期間、QOL 改善
	主な結果	90 例（膵癌 53 例、胆道癌 37 例）をランダムに化学療法群と支持療法群に割り付けた。化学療法の Regimen は 5-FU+leucovorin or 5-FU+leucovorin+etoposide を用いた。 生存期間中央値は、全体対象では化学療法群 6 ヵ月、支持療法群 2.5 ヵ月（p<0.01）、膵癌患者では化学療法群 6 ヵ月、支持療法群 2.5 ヵ月（p=0.05）、胆道癌患者では化学療法群 6.5 ヵ月、支持療法群 2.5 ヵ月（p=0.1）であった。QOL の改善も化学療法群で 36%(膵癌 38%、胆道癌 33%)、支持療法群で 10%（膵癌 13%、胆道癌 5%）と化学療法群で有意に良好であった(p<0.01)。
	結論	化学療法は膵癌および胆道癌患者の生存期間、QOL を改善し得る。しかし、依然化学療法のベネフィットを得られる患者は限られており、適応やモニターリングは慎重に行うべきである。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰワーコメント	レビューワー氏名	清水　伶、古瀬純司
	レビューワーコメント	化学療法が生存と QOL を改善するか否かを無治療と比較し、有意に化学療法の有用性を示した。胆道癌に限ると症例数が少なく、有意差は認めていないが、膵癌と同様に生存期間は延長していた。化学療法のベネフィットが証明されたが、結論にあるように治療成績は不十分であり、化学療法の適応とモニターリングには慎重を要する。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	膵癌、胆嚢癌、胆管癌	
	タイプ	前向きランダム化比較試験	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Prospective randomized trial of 5-fluorouracil, doxorubicin, and mitomycin C for non-resectable pancreatic and biliary carcinoma: Multicenter randomized trial	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ28,29	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 7 ）	
	Pubmed ID	9951857	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Hepatogastroenterology	
	雑誌 ID		
	巻	45	
	号	24	
	ページ	2020-2026	
	ISSN ナンバー	0172-6390 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Nov-Dec 1998	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Takada T	First Department of Surgery, Teikyo University School of Medicine, Tokyo, Japan.
	その他著者 1	Nimura Y	First Department of Surgery, Nagoya University School of Medicine, Nagoya, Japan
	その他著者 2	Katoh H	Second Department of Surgery, Hokkaido University School of Medicine, Sapporo, Japan
	その他著者 3	Nagakawa T	Second Department of Surgery, Kanazawa University School of Medicine, Kanazawa, Japan
	その他著者 4	Nakayama T	Second Department of Surgery, Kurume University School of Medicine, Kurume, Japan
	その他著者 5	Matsushiro T	Department of Surgery, Tohoku Rosai Hospital, Sendai, Japan
	その他著者 6	Amano H	First Department of Surgery, Teikyo University School of Medicine, Tokyo, Japan.
	その他著者 7	Wada K	

ﾚﾋﾞｭｰ研究の 6 項目	目的	切除不能膵癌および胆道癌に対する 5-FU+ドキソルビシン+マイトマイシン C と無治療群とのランダム化比較により、同治療の有効性を評価する。
	データソース	多施設共同　1989 年 8 月 - 1991 年 7 月
	研究の選択	主な選択基準：組織診断された、切除不能膵癌または胆嚢癌、胆嚢癌、胆管癌患者、Japanese Cancer Therapy Society Chemotherapy Efficacy Evaluation Criteria による PS0-3、臓器機能保持
	データ抽出	評価項目：毒性、生存期間、50%time-to-progression (TTP)、奏効率、臨床的症状緩和効果(PS や体重)
	主な結果	投与方法は、化学療法治療群（以下 A 群）5-FU200mg/m^2,ドキソルビシン 15mg/m^2,マイトマイシン C5mg/m^{2}を週 1 回投与、4 週 1 コースとし、次コース開始まで 1 週空ける。コントロール群（以下 B 群）は、化学療法を行わない。A 群では 42 例が登録され、膵癌 28 例、胆嚢癌 10 例、胆管癌 4 例。B 群では 41 例が登録され、膵癌 24 例、胆嚢癌 8 例、胆管癌 9 例。生存期間中央値は A 群 151 日、B 群 143 日で有意差なし。胆嚢癌症例においてのみ有意差が認められた(A 群 157 日、B 群 73 日)。50%TTP は A 群 90 日、B 群 43 日で有意差が認められた。奏効率は A 群で CR1（膵）、PR2（胆嚢 2）、NC12（膵 11、胆嚢 1）、PD23(膵 14、胆嚢 7、胆管 2)、未評価 4(膵 2、胆管 2)。B 群で CR0,PR0、NC5(膵 4、胆嚢 1)、未評価 17（膵 7、胆嚢 2、胆管 8)。症状緩和効果は A 群で良好な傾向にあったが、有意差はなかった。A 群における Grade3 毒性は、食思不振 15 例、嘔気・嘔吐 5 例、脱毛 2 例、Grade4 毒性はビリルビン上昇 1 例、BUN 上昇 2 例であった。
	結論	この治療法は腫瘍増大を抑える効果が期待でき、胆嚢癌症例では腫瘍径を抑える効果もある程度ある。今後より有効な化学療法を開発する上での基礎となる。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰワーコメント	レビューワー氏名	鈴木英一郎　古瀬純司
	レビューワーコメント	5-FU+ADM+MMC によるランダム化比較試験であるが、化学療法の有無で生存期間に有意な差がみられず、標準治療とはなりえない。Subset 解析によると、胆嚢癌では有意差が認められており、臨床での適応を考慮してもよい。ただし、症例数が少なく、標準治療の位置付けは難しい。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	膵癌、胆管癌、胆嚢癌	
	タイプ	前向きランダム化比較試験	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Comparison of 5-fluorouracil, doxorubicin and mitomycin C with 5-fluorouracil alone in the treatment of pancreatic-biliary carcinomas	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ29	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 3 ）	
	Pubmed ID	8052479	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Oncol.	
	雑誌 ID		
	巻	51	
	号	5	
	ページ	396-400	
	ISSN ナンバー	0030-2414 (Print)	
	雑誌分野	①.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ ）	
	原本言語	1.日本語②.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ ）	
	発行年月	Sep-Oct 1994	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Takada T	First Department of Surgery, Teikyo University School of Medicine, Tokyo, Japan
	その他著者 1	Kato H	Second Department of Surgery, Hokkaido University School of Medicine, Sapporo, Japan
	その他著者 2	Matsushiro T	Department of Surgery, Tohoku Rosai Hospital, Sendai, Japan
	その他著者 3	Nimura Y	First Department of Surgery, Nagoya University School of Medicine, Nagoya, Japan
	その他著者 4	Nagakawa T	Second Department of Surgery, Kanazawa University School of Medicine, Kanazawa, Japan
	その他著者 5	Nakayama T	Second Department of Surgery, Kurume University School of Medicine, Kurume, Japan

レビュー研究の 6 項目	目的	進行膵癌および胆道癌に対して 5-FU+ADR＋MMC 療法群(A 群)と、5-FU 単独群（B群）に無作為に分け、前向き比較による評価を行う。
	データソース	多施設共同 1988 年 6 月 - 1989 年 5 月
	研究の選択	主な選択基準：組織診断された切除不能膵、胆道癌患者であること、75 歳以下、Japan Society for Cancer Therapy による PS0－3、前治療より 4 週以上経過
	データ抽出	評価項目：奏効率、症状緩和効果、time-to-progression(TTP)、生存期間
	主な結果	A群:MMC6mg/m² day1、5-FU 310mg/m² for Day1-5 in week1 and week3、ADR12mg/m²/day in the week2 of treatment. 6 週ごと繰り返し。B 群：5-FU を A 群の 5-FU と同様に投与。81 例が登録され、評価対象は 71 例(A 群 35 例、B 群 36 例)。治療効果は A 群 PR1(4%)、NC10(40%)、PD14 例(56%)で奏効率 4%、B 群 PR0、NC12(46%)、PD14(54%)で奏効率 0%。TTP 中央値は A 群 3.1 ヵ月、B 群 2.5 ヶ月。生存期間中央値は A 群 6.2 ヶ月、B 群は 6.0 ヵ月 毒性：Grade 2 以上好中球減少(A 群 36%、B 群 17%)、肝機能悪化（A 群 46%、B 群 33%）、食思不振（A 群 51%、B 群 53%）、悪心・嘔吐（A 群 31%、B 群 36%）、脱毛（A 群 26%、B 群 3%）であり、脱毛で有意差が見られた。症状緩和効果は両群で差は見られなかった。
	結論	A 群の Combination Therapy は実行可能だが、治療効果において B 群の 5-FU 単独と比べて差はなく、推薦されない。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	鈴木英一郎 古瀬純司
	レビューワーコメント	わが国では、切除不能胆道癌における初めての前向きランダム化比較試験である。5-FU、ADR、MMC の併用療法群は 5-FU 単独群に比べ生存期間の延長は認められなかった。いずれの治療法も標準治療としての評価は難しいと考えられる。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆管癌、胆嚢癌	
	タイプ	前向き非比較第 II 相試験	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Combining gemcitabine and capecitabine in patients with advanced biliary cancer: A phase II trial	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ29	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 5 ）	
	Pubmed ID	15800324	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Clin Oncol	
	雑誌 ID		
	巻	23	
	号	10	
	ページ	2332-2338	
	ISSN ナンバー	0732-183X (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Apr 12005	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Knox JJ	Princess Margaret Hospital, Canada.
	その他著者 1	Hedley D	
	その他著者 2	Oza A	
	その他著者 3	Feld R	
	その他著者 4	Siu LL	
	その他著者 5	Chen E	
	その他著者 6	Nematollahi M	
	その他著者 7	Pond GR	
	その他著者 8	Zhang J	
	その他著者 9	Moore MJ	
	その他著者 10		

レビュー研究の 6 項目	目的	進行胆道癌に対するカペシタビン+ゲムシタビンの first line 治療としての有効性と忍容性を評価する
	データソース	Princess Margaret Hospital 単施設、2001 年 7 月－2004 年 11 月
	研究の選択	主な選択基準：組織診断された切除不能胆道癌患者、前化学療法歴なし、PS 0-2、臓器機能保持
	データ抽出	評価項目:奏効率、毒性、progression-free-survival(TTP)、生存期間
	主な結果	レジメン: Gemcitabine 1000mg/m², day 1, 8, capecitabine 1300 mg/m², day 1-14, 1 week off, every 3 weeks 45 例が登録され、治療を受けた。内訳は、胆管癌 23 例、胆嚢癌 22 例。有効性：CR2(4%)、PR12(27%)、SD19(42%)、PD12(27%), 奏効率 31%。 PFS 中央値 7.0 ヵ月、生存期間中央値 14.0 ヵ月、1 年生存率 49%。 Grade 3/4 有害事象: 好中球減少 34%、血小板減少 11%。
	結論	進行胆道癌患者において、first line 治療としてゲムシタビン+カペシタビン化学療法は有効であり、十分な忍容性を認めた。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	仲地耕平、古瀬純司
	レビューワーコメント	単アームによるゲムシタビン+カペシタビンの前向き試験である。これまでのゲムシタビン単独に比べ、奏効率、生存期間ともに良好である。症例数が 45 例と少なく、正確な評価のためにはランダム化比較試験が必要である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆嚢癌、肝外胆管癌、乳頭部癌	
	タイプ	前向き非比較第 II 相試験	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Phase II study of single-agent gemcitabine in patients with advanced biliary tract cancer	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ29	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 5 ）	
	Pubmed ID	16142487	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer Chemother Pharmacol	
	雑誌 ID		
	巻	57	
	号	5	
	ページ	647-653	
	ISSN ナンバー	0344-5704 (Print)	
	雑誌分野	①.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ ）	
	原本言語	1.日本語 ②.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ ）	
	発行年月	May 2006	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Okusaka T	National Cancer Center Hospital, Japan
	その他著者 1	Ishii H	National Cancer Center Hospital East, Japan
	その他著者 2	Funakoshi A	National Kyushu Cancer Center, Japan
	その他著者 3	Yamao K	Aichi Cancer Center, Japan
	その他著者 4	Ohkawa S	Kanagawa Cancer Center, Japan
	その他著者 5	Saito S	Aomori Prefectual Central Hospital, Japan
	その他著者 6	Saito H	Yamagata Prefectual Central Hospital, Japan
	その他著者 7	Tsuyuguchi T	Chiba University Hospital, Japan
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の 6 項目	目的	進行胆道癌に対するゲムシタビンの有効性と毒性を評価する
	データソース	多施設共同、2001 年 10 月－2003 年 9 月
	研究の選択	主な選択基準：組織診断された切除不能胆道癌患者、測定可能病変あり、切除、術後補助放射線療法以外の前治療なし、ECOG PS 0-2、年齢 20-74 歳、臓器機能保持
	データ抽出	評価項目：奏効率、毒性、無増悪生存期間、奏効期間、全生存期間
	主な結果	ゲムシタビン単独による全身化学療法 1000 mg/m²、週 1 回 30 分で点滴静注、3 週連続投与、1 週休薬を 4 週毎に繰り返す 胆道癌患者 40 例(胆嚢癌 22 例、肝外胆管癌 12 例、乳頭部癌 6 例)中 PR7, SD15, PD 17、Response rate 17.5% (95%CI: 7.3-32.8%)、奏効期間中央値 9.4 ヶ月 主な Grade 3/4 の血液毒性は好中球減少(30%)、白血球減少(12.5%)、貧血(10%)、非血液毒性は ALT 上昇(15%), g-GTP 上昇(12.5%) 無生存期間中央値 2.6 ヶ月、生存期間中央値 7.6 ヶ月、1 年生存率 25%
	結論	進行胆道癌患者におけるゲムシタビン単独による全身化学療法は中等度の有効性と十分な忍容性を示した。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	古瀬純司
	レビューワーコメント	わが国で行われた前向き臨床試験である。比較試験ではないがこれまでのゲムシタビンの報告と比べ妥当な治療成績が得られている。日本イーライリリーによる治験の成績である。この成績を元に日本による胆道癌に対する保険適応が承認された。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆嚢癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Is postoperative adjuvant chemotherapy useful for gallbladder carcinoma? A phase III multicenter prospective randomized controlled trial in patients with resected pancreaticobiliary carcinoma	
	論文の日本語タイトル	胆嚢癌に対し術後補助化学療法は有用か	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ30	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 3 ）	
	Pubmed ID	12365016	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	95	
	号	8	
	ページ	1685-1694	
	ISSN ナンバー	0008-543X	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Takada T	Teikyo University
	その他著者 1	Amano H	Teikyo University
	その他著者 2	Yasuda H	Teikyo University
	その他著者 3	Nimura Y	Nagoya University
	その他著者 4	Matsushiro T	Tokushima University
	その他著者 5	Kato H	Hokkaido University
	その他著者 6	Nagakawa T	Kanazawa University
	その他著者 7	Nakayama T	Kurume University
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾋﾞｭｰ研究の 6 項目	目的	膵・胆道癌における無再発生存期間へ及ぼす術後化学療法の影響を検討する
	データソース	検討症例と研究計画内容は明示されている
	研究の選択	ＲＣＴ
	データ抽出	選択基準示されず
	主な結果	1986 年 4 月から 1992 年 6 月までの期間において、日本の 31 施設における Stage II －IV の膵癌、胆嚢癌、胆管癌、Vater 乳頭部癌切除症例について化学療法群と手術単独群の 2 群に分け、術後無再発生存期間へ及ぼす影響を検討した。薬物療法については、手術日に mitomycin C(6mg/m2)を急速静注し、5-FU(100mg/m2)については、術後第一週目および三週目に 5 日間/週について緩速静注するとともに、術後五週目まで 5-FU(100mg/m2)を経口投与した。胆嚢癌の適格症例数は薬物使用 69 例と、非使用 43 例、胆管癌のそれは 58 例と 60 例、ファーター乳頭部のそれは 24 例と 24 例であった。5 年生存率を比較したところ胆嚢癌薬物使用群 26.0%, 非使用群 14.4%であった。胆管癌のそれは、26.7%,と 24.1%, ファーター乳頭部のそれは 28.1%と 34.3%であった。
	結論	胆道癌（胆嚢癌、胆管癌、ファーター乳頭部癌）症例に対する MMC および 5-FU を用いた術後補助化学療法のレジメン実施の結果、5 年生存率を指標とすると胆嚢癌においてのみその有用性が示唆された。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	平田　公一
	レビューワーコメント	胆道癌の補助療法についての RCT による臨床研究は、本報告の他に 1 編あるのみでいずれも日本からのものである。他国での研究報告がない理由としては、発癌率が日本・韓国で高く、欧米など諸外国で低いことがその背景にある。本報告は胆嚢癌で術後補助化学療法は有用で、胆管癌では有用性がみられなかったと結論付けた。他のひとつの報告結果に比較し有用とする対象胆道癌腫が全く異なった。今後、その真実性を明らかにするためには、大規模な臨床試験が行なわれるべきであろう。今日の臨床の場においては、新たな術後補助療法の有用性の有無を検討する臨床試験の実施または保険適用となっている薬剤を用いた補助化学療法の実施が考えられる。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	胆道癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Adjuvant chemotherapy with 5-fluorouracil, mitomycin C and OK-432 for resected biliary cancer－A prospective randomized trial by Niigata Cooperative Study Group－	
	論文の日本語タイトル	胆道癌切除症例に対する 5-FU, MMC, OK-432 による術後補助免疫化学療法―新潟地区における共同研究による Prospective Randomized Trial―	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ30	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 3 ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	1991140723	
	雑誌名	Biotherapy	
	雑誌 ID		
	巻	4	
	号	11	
	ページ	1787-1793	
	ISSN ナンバー	0914-2223	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 1 ）	
	発行年月	1990	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	伊賀 芳朗	新潟大学医学部
	その他著者 1	吉田 奎介	新潟大学医学部
	その他著者 2	杉本不二夫	新潟大学医学部
	その他著者 3	白井 良夫	新潟大学医学部
	その他著者 4	塚田 一博	新潟大学医学部
	その他著者 5	武藤 輝一	新潟大学医学部
	その他著者 6	山本 正治	新潟大学医学部
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の 6 項目	目的	胆道癌の術後補助免疫化学療法の有用性の有無
	データソース	日本の新潟県における 1986 年 12 月から 1988 年 12 月までの切除可能であった胆嚢癌 38 例と胆管癌 26 例
	研究の選択	RCT
	データ抽出	手術基準・診断基準（組織診断含む）が明確
	主な結果	胆嚢癌 38 例、胆管癌 26 例の切除症例を対象とし、mitomycin(MMC), fluorouracil(5-FU), OK-432 の 3 剤併用による術後補助免疫化学療法の有用性について検討した。手術当日、封筒法により免疫化学療法併用群（投与群）、手術単独群（非投与群）に割り付け、比較検討した。登録例 64 例のうち 10 例は除外・脱落例となった。10 例中 4 例は術後病理学的検索にて良性疾患と判定され、4 例は術直後に死亡し、1 例は術直後よりショック状態が続き薬剤投与を開始できず、1 例のみが薬剤投与による副作用により脱落症例となった。胆嚢癌 14 例、胆管癌 9 例を投与群、胆嚢癌 18 例、胆管癌 13 例を非投与群として解析した。術後 30 ヶ月における累積生存率を比較すると、胆嚢癌薬剤投与群で 69.8%、非投与群で 81.9%と差を認めなかったが、胆管癌薬剤投与群において 75.0%と非投与群の 31.9%より高い傾向が認められた。副作用では両群で大きな差はなかった。
	結論	胆嚢癌および胆管癌切除症例に対し、MMC, 5-FU, OK-432 を用いた術後補助療法免疫化学療法を施行し、累積生存率を比較したところ、その有用性を胆管癌で認めた。胆嚢癌では、それを示唆する所見はなかった。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	平田 公一
	レビューワーコメント	胆道癌の補助療法についての RCT による臨床研究は、本報告の他に 1 編あるのみでいずれも日本からのものである。他国での研究報告がない理由としては、発癌率が日本・韓国で高く、欧米など諸外国で低いことがその背景にある。本報告は胆管癌で術後補助免疫化学療法は有用で、胆嚢癌では有用性がみられなかったと結論付けた。他のひとつの報告結果に比較し有用とする対象胆道癌腫が全く逆となった。今後、その真実性を明らかにするためには、大規模な臨床試験が行なわれるべきであろう。今日の臨床の場においては、新たな術後補助療法の有用性の有無を検討する臨床試験の実施または保険適用となっている薬剤を用いた補助化学療法の実施が考えられる。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝外胆管癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	The impact of radiation dose in combined external beam and intraluminal IR-192 brachytherapy for bile duct cancer	
	論文の日本語タイトル	胆管癌の外照射併用腔内イリジウム192小線源治療における放射線量の影響	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 2 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	**CQ31**	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5. 非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	8138448	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Int J Radiat Oncol Biol Phys	
	雑誌 ID		
	巻	28	
	号	4	
	ページ	945-951	
	ISSNナンバー	0360-3016	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1994年3月	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Alden ME	Thomas Jefferson University Hospital
	その他著者1	Mohiuddin M	Thomas Jefferson University Hospital
	その他著者2		
	その他著者3		
	その他著者4		
	その他著者5		
	その他著者6		
	その他著者7		
	その他著者8		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	胆管癌の外照射併用腔内照射における放射線量が生存、有害事象に及ぼす影響を調べる
	データソース	肝外胆管癌48例、Thomas Jefferson University Hospital、1983-1990
	研究の選択	低線量 vs. 高線量
	データ抽出	放射線量と効果の関係を調べる
	主な結果	全例の2年生存率は18%であった。放射線療法施行群24例、非施行群24例の2年生存率は30%、17%で有意差があった。55 Gy以上、55 Gy未満の各症例の2年生存率は48%、0%で有意差があった。この傾向はT病期で層別化しても同様であった。45 Gy未満、45-55 Gy、55-65 Gy、66-70 Gyの各症例の生存中央値は4.5ヶ月、9ヶ月、18ヶ月、25ヶ月で、放射線量が増加するにつれて延長しており、線量反応関係の存在が示唆された。放射線治療による合併症は1例のみであった。
	結論	55 Gy以上の症例では2年生存率、生存中央値が二倍を超えており、線量反応関係が示された。腔内照射25 Gy (at 1 cm)と外照射44-46 Gyの治療は認容性が高かった。高線量(60-75 Gy)の外照射併用腔内照射は肝外胆管癌に最も効果的な治療手段と思われた。
	備考	抽出、配布された文献以外の新たに選択した文献
	レビューワー氏名	
レビューワーコメント	レビューワーコメント	放射線量の増加が生存期間延長をもたらす可能性を示唆した報告である。外照射線量が27-60(平均46)Gy、腔内照射線量が9-33(平均25)Gyとそれぞれ幅があり、腔内照射併用の意義を直接検討することは困難だったようである。本報告では未治療11例と手術6例と化学療法7例を放射線非施行群、外照射＋腔内照射±化学療法13例と外照射＋化学療法8例と腔内照射±化学療法3例を放射線施行群にまとめて比較している。少数例にもかかわらず治療法が多岐にわたっており、結論の解釈や一般化には注意を要する。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	肝外胆管癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Combination of external beam irradiation and high-dose-rate intraluminal brachytherapy for inoperable carcinoma of the extrahepatic bile ducts	
	論文の日本語タイトル	手術不能肝外胆管癌に対する外照射と高線量率腔内小線源治療の併用	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（　1　）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ31	
書誌情報	研究デザイン	1. ﾚﾋﾞｭｰ　2. ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ　3. ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4. 非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験　5. 非比較試験　6. ｺﾎｰﾄ研究 7. 症例対照研究 8. 症例集積 9. 症例報告 10. 横断研究 11. 比較観察研究 12. 非比較観察研究 13. その他 （　8　）	
	Pubmed ID	12909222	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Int J Radiat Oncol Biolog Phys	
	雑誌 ID		
	巻	57	
	号	1	
	ページ	105-112	
	ISSNナンバー	0360-3016	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（　1　）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（　2　）	
	発行年月	Sept 2003	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Shin HS	Pundang CHA General Hospital
	その他著者1	Seong J	Yonsei Cancer Center
	その他著者2	Kim WC	Inha University
	その他著者3	Lee HS	Dong-A University
	その他著者4	Moon SR	Wonkwang University
	その他著者5	Lee IJ	Yonsei Cancer Center
	その他著者6	Lee KK	Yonsei Cancer Center
	その他著者7	Park KR	Yonsei Cancer Center
	その他著者8	Suh CO	Yonsei Cancer Center
	その他著者9	Kim GE	Yonsei Cancer Center
	その他著者10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	手術不能肝外胆管癌に対する外照射併用高線量率腔内照射の認容性、治療有用性を評価する
	データソース	肝外胆管癌31例、Yonsei Cancer Center、1986-1995
	研究の選択	外照射単独 vs. 外照射+腔内照射
	データ抽出	外照射+高線量率腔内照射の有用性
	主な結果	再発率（53% vs. 36%）に有意差はなかったが、腔内照射併用群では再発遅延効果（5ヶ月 vs. 9ヶ月）を認めた。放射線による合併症は両群で同様であった。腔内照射併用による有害事象の増強は認めなかった。2年生存率（0% vs. 21%）は腔内照射併用群が良好であった。
	結論	肝外胆管癌に対する外照射併用高線量率腔内照射は安全で有用な治療法である。手術不能肝外胆管癌の治療成績の改善に有効な可能性がある。
	備考	
	レビューワー氏名	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワーコメント	外照射（中央値50.4Gy）に腔内照射15Gy/3分割（at 1.5 cm）を併用した群で生存率が良好であり、線量効果関係、腔内照射の有用性を示唆した報告である。少数例の遡行的分析であるため、決定的な結論とは言えない。しかし高線量率腔内照射と外照射の併用療法を外照射単独と比較した報告は少なく、今後、切除不能胆管癌に対する放射線治療の標準化にむけて重要な文献と思われる。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患		
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Intraoperative radiation therapy of extrahepatic biliary carcinoma: A report of RTOG-8506	
	論文の日本語タイトル	CQ32	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（　）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	CQ32	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ　2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ　3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験　4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験　6.ｺﾎｰﾄ研究　7.症例対照研究　8.症例集積 9.症例報告　10.横断研究　11.比較観察研究　12.非比較観察研究 13.その他　（　）	
	Pubmed ID	1514529	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Am J Clin Oncol	
	雑誌 ID	8207754	
	巻	15	
	号	4	
	ページ	323-327	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（1　）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（　2　）	
	発行年月	Aug 1992	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Wolkov HB	Radiation Oncology Center, Sutter Memorial Hospital, Sacramento
	その他著者 1	Graves GM	Radiation Oncology Center, Sutter Memorial Hospital, Sacramento
	その他著者 2	Won M	Radiation Oncology Center, Sutter Memorial Hospital, Sacramento
	その他著者 3	Sause WT	Radiation Oncology Center, Sutter Memorial Hospital, Sacramento
	その他著者 4	Byhardt RW	Radiation Oncology Center, Sutter Memorial Hospital, Sacramento
	その他著者 5	Hanks GE	Radiation Oncology Center, Sutter Memorial Hospital, Sacramento
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	術中照射と術後照射の組み合わせに対する Phase I-II study
	データソース	胆道癌 23 例、RTOG　1985.11-1989.9
	研究の選択	放射線治療の安全性
	データ抽出	
	主な結果	23 例中 16 症例のみ適格条件を満たし 8 例に治療を行った。1 例が胆嚢癌で、7 例が胆管癌症例。13.75-22Gy の IORT を施行した後、45-50Gy 放射線外照射を行った。中央値 10.4 ヶ月の観察期間で 2 例が生存中。
	結論	重篤な合併症はなく治療は完遂でき、受容されうる治療と考えられた。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	
	レビューワーコメント	症例の選択基準が曖昧で、手術不能例、術後の残存例、局所再発例など 8 例のみにしてもあまりにばらつきが多い。